

(4)母のことばと反省的対象化

丸山が震災時に受けた衝撃は、母セイのことばとともに想起されている。甘粕事件については、「ひどい」という母の感想が語られ、朝鮮人虐殺事件については、「長谷川〔如是閑〕さんでさえ朝鮮人のうわさを信じた」という母のことばが紹介されている。他者の評価の受け売りではなく、自分自身で対象を反省的に捉えようになっていく一つの契機として、こうした母のことばが作用したと考えられる。

後年、丸山は、環境に埋没せず、精神的に自立するための一つの方法として、「なにより経験したことを忠実に記述することが、自分をふくめた環境を対象化するけいこになる」と述べている。『恐るべき大震災大火災の思出』を書き、それを製本したことは、自分の環境から距離をとってそれを捉える視点をもちつつあったことのあらわれとしても理解できよう。母のことばと不可分の関係にある震災の体験は、丸山の知的成長過程において大きな画期と位置づけられる（画像：丸山セイと子どもたち〈丸山彰氏提供〉）。

